

共にあり、共に感じて

病院は、病や老い、心身の機能の衰えといった人間誰もが抱える「生命」と「生活」の切実さが一層意識される時間と場所です。診断や治療の真剣な場であるがゆえに、その場での個人の立ち現れ方は、患者や家族、医療者などの役割に特化しがちです。『びょういんあーとぶろじえくと』は、そうした医療の場に長い時間をかけてアート作品を介在させる活動を2008年から続けてきました。アートは、周囲の環境を生き生きと受け止め、その関係の中で各自の意義や生活を築いている人間の感受性を前提にしてい

ます。インテリアやケアという側面のみならず、アートがあること自体が人々にその場での立場を超えて「感受する主体としての人間」を無言のうちに呼び覚ますと言えるかもしれません。『びょういんあーとぶろじえくと』では、2019年から2021年冬までの約3年、医療の場を、こころの通った温もりの感じられる人間らしい空間に近づけようと、美術家17名による5回の展覧会とイベントを継続開催中です。その3回目となる今回は「はな・うた・さんぽ」がテーマです。小さかった頃のお馴染みの

道、陽だまりで触れた石の暖かさ、よく口ずさんだ歌、日常を当然のように享受してきた記憶の連なり。楽しい記憶や悲しい記憶。アートの介在によって病院で過ごすすべての方々の時間に、そんな彩りが生まれることを願っています。そして、この企画の主旨に賛同し参加されている多くの作家やスタッフの方々の思いが、作品に出会う人々と共に今年も豊かな場を創り上げることが願っています。

TEXT 北海道大学大学院
メディア・コミュニケーション研究院
研究員 加藤 康子 氏



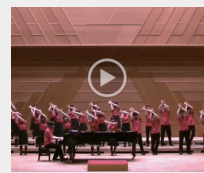
こころを結ぶ通信箱 コトバコ

コロナ禍により院内での面会等が制限される中、ご家族、医療スタッフ、アーティストの心を結ぶ「言葉の箱」を設置しました。

びょういんあーとぶろじえくと19-21展 全スケジュール(予定)

- vol.1 2019年 小川豊 小山恵隆 佐藤隆之
- vol.2 2020年 上嶋秀俊 野村裕之 山田恭代美
- vol.3 2021年 會田千夏 瀨川葉子 日野間尋子 藤山由香
- vol.4 2022年 伊藤幸子 奥野侯子 佐藤綾香 高橋佳乃子
- vol.5 2022年 安藤文絵 小林麻美 八子直子

札幌第一高等学校 合唱部からのメッセージ



私達の合唱が皆さんの笑顔につながると嬉しいです。また病院でお会いできる日を楽しみにしています。
<https://bit.ly/39qCvux>

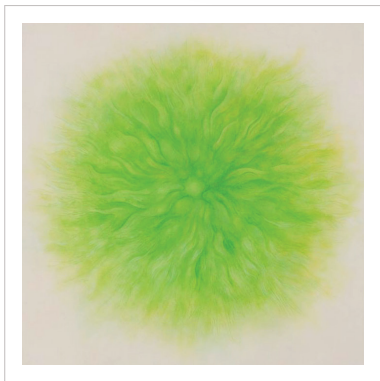


主催：びょういんあーとぶろじえくと
後援：札幌市 札幌市教育委員会
(公財)道銀文化財団 (公財)北海道文化財団
NPO法人市民と共に創るホスピスケアの会
場所：札幌ライラック病院
札幌市豊平区豊平6-8-2-1
011-812-8822 <http://www.lilac.or.jp>
会期：2021.5/31(月)～10/1(金) 12:00～18:00
テーマ：びょういんあーとぶろじえくと19-21展(第15回)
vol.3-『はな・うた・さんぽ』
アーティスト：會田千夏 瀨川葉子 日野間尋子 藤山由香

テキスト：加藤康子 森合音
表紙絵：のぶこ(北の峯学園)
展示：吉田恭子
デザイン：井上始子
撮影：山岸靖司

ご連絡先
びょういんあーとぶろじえくと代表 日野間尋子
✉ hj2021@hinoma.com
🌐 www.facebook.com/Byouinatopurojekuto
🏠 www.hinoma.com/hospitalart/





會田 千夏

Aita Chinatsu

1980年、看板屋の一人娘として生まれる。両親の「筆」を使う仕事の環境の中で生れ育ちました。父親が歌う子守唄は「ゲゲゲの鬼太郎」、好んで母親に読んでもらった絵本は赤羽末吉・絵の「舌切り雀」。そんな影響からか、子供の頃から不思議な話や空想が好き。また、喘息発作で幼稚園、学校を休むことが多かったせいで、「絵を描く」という一人遊びは得意な方です。そのまま大人になれたことに感謝しています。「はな・うた・さんぽ」では、その日その時に感じた気持ち・見つけた物語を、色や形にしていきたいと考えています。札幌、東京での展覧会の他、北海道新聞文化面・池澤夏樹エッセイ「天はあおおお 野はひろびろ」挿絵担当。

吉・絵の「舌切り雀」。そんな影響からか、子供の頃から不思議な話や空想が好き。また、喘息発作で幼稚園、学校を休むことが多かったせいで、「絵を描く」という一人遊びは得意な方です。そのまま大人になれたことに感謝しています。「はな・うた・さんぽ」では、その日その時に感じた気持ち・見つけた物語を、色や形にしていきたいと考えています。札幌、東京での展覧会の他、北海道新聞文化面・池澤夏樹エッセイ「天はあおおお 野はひろびろ」挿絵担当。



瀬川 葉子

Segawa Yoko

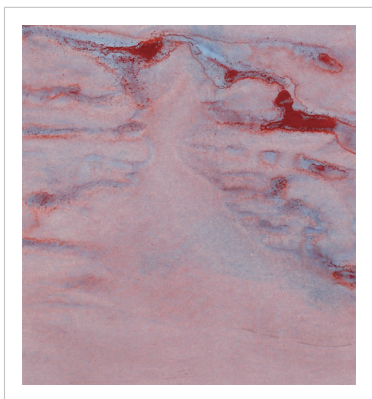
1955年、札幌生まれ。札幌在住。子どもの頃、祖父母の住む定山溪温泉で豊平川と森林に囲まれた自然の中で過ごす。子ども絵画造形教室の仕事をしたことで、子どもが造る気持ちを意識するようになる。しばらく絵から離れていたが、50代になり、事務

仕事のかたわら、メモ用紙や封筒に小さなカットを描き始める。紙ゴミの箱やティッシュペーパーの箱に色を塗ったりしながら、小さな出来事を重ねるようにして作品作りができることに、ささやかな喜びを感じる。体調により身体が受け入れる色や形に変化があることを思っている。今回、病院のエントランスに展示させていただくことになり、一斉に花々が咲き、清々しい初夏の札幌の空気を表現したいと思う。

日野間 尋子

Hinoma Hiroko

1962年、夏、旭川市生まれ。札幌市在住。5歳の時、家の近くにあった「絵画教室」で初めて水彩絵具に触れ、水に色を混じり合わせる遊びに夢中になる。

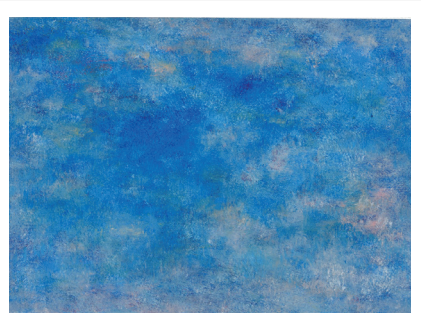


短大の工芸美術科を卒業後、1986年より札幌、東京にて個展、グループ展。2000年から2006年まで欧州でのアートプロジェクトに参加。その間、芸術療法士（音楽/美術）との出会い、共同制作を通して「ケアとアート」の接点に注目するようになる。札幌に戻り、障害者支援施設で支援員として働く傍ら、2008年、友人らと『びょういんあーとぶろじょくと』を立ち上げる。アートが、病院に関わる皆さんの気持ちを和らげたり、結んだりする一翼となって働いてくれることを願います。

藤山 由香

Fujiyama Yuka

1974年、札幌生まれ、札幌在住。幼少より絵を描くことが好きで、高校は美術コースを選択。美術部にも在籍し、多くの刺激を受ける。卒業後、金融機関に勤め、3年後退職。アルバイトをしつつ美術大学の通信教育で学ぶ。夏の面接授業を東京で過ごし、札幌では自然がいかに身近であったかを改めて実感。大学卒業後、ギャラリーミヤシタのオーナーと出会い抽象画を描き始める。色の持つ美しさや調和に面白さを感じ、同ギャラリーにて青や白を基調とした作品を毎年発表。近年は川沿いを歩く機会が多く、空を眺め、川風を受けながら季節の移り変わりを日々肌で感じ、作品に反映させている。心穏やかに、すこやかに、優しさが溢れることを願って。



「はな・うた・さんぽ」展に寄せて

TEXT

森 合音 氏

独立行政法人国立病院機構
四国こどもとおとなの医療センター
ホスピタルアートディレクター

一人のアーティストに出会うことは一つの新しい扉を開くことに似ています。
美術家、日野間尋子さんとの出会いもそうでした。私は彼女と会って間もないのになんとも言えない居心地の良さを感じました。何かを押し付けるでもなく、離れるでもなく、植物のようにそっと静かに佇んでいる。彼女が始めた「びょういんあーとぶろじょくと」もそう。作品たちはただ、静かにそこにいて、いつか扉が開かれることを待っている。開いた扉から新しい風や香りや音楽が聞こえて、誰かが少しだけ幸せな気分になることを彼女は信じているから。いつかの自分もそうだったように。芸術の力を病院に届けることは簡単ではありません。でも諦めないで続けられるその力の源は、その人がどれくらい芸術の力を信じているのか。に尽きると思います。

「はな・うた・さんぽ」展どれも扉を開けば見えてくる唯一無二の作家の風景です。ぜひお楽しみください。